

Re:世界を修正する戦隊

ガンダムラザーニャ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サイボーグ009こと島村ジョーは大気圏に突入し燃え尽きて、その人生の幕を閉じた。

だがしかし、彼は転生し、新たな戦いに身を投じることとなる。

これは、崩壊の危機にある世界を修正する物語。

※これは『世界を修正する戦隊』のリメイク版で、一部キャラを変更しております。

またこの作品はボルメテウスさんの『特典で世界を再構成する戦隊』との合同となります。

目次

プロローグ	1
己のルール	25
高く翔ぶ刃	39
あざみは忍者	50
爆裂する街を掛けるチーター	65

プロローグ

サイボーグ009こと、島村ジョーの人生は劇的というのに相応しかった。

孤児として教会で育ち、育ての親である神父を殺害した犯人に間違えられて警察に追われていたところをブラックゴーストに拉致された。

そのブラックゴーストにて、サイボーグとして改造された彼は、同じくサイボーグに改造された8人の仲間達と共にブラックゴーストとの戦いの日々を繰り広げていた。

その激闘の末、ブラックゴーストの魔神像が崩壊し、ブラックゴーストは終焉を迎えて、009は宇宙空間を漂っていた。

その際助けに来てくれた002は、宇宙空間に来るまでにエネルギーをほとんど使い果たしてしまい、戻れなくなった。

このままだと二人とも大気圏突入で燃え尽きてしまう009は、それでも002だけなら助かるかもしれないと考え、自分を放せと言った。

だが

『仲間なんだからできるわけないだろー！』

そう、002はそれを言い続けていた。

やがて大気圏に突入し、二人の体は燃え尽きそうになる。

その中、ふと、002から聞こえた声。

『なあ009、お前はどこに墮ちたい?』

その言葉を聞いた最後に、燃え尽きた。

「…っ、ハハハは?」

サイボーグ009こと、島村ジョーは気が付けば布団で寝かされていた。

それはまるで、彼が初めてブラックゴーストで改造手術を行われた直前を思い浮かべた。

だが、あの時とは違い、丁寧に寝かされていた。

ここはどこだと周りを見るが、近くに同じく大気圏に突入して燃え尽きたはずの002がいない。

だがこの見た感じはどこかの実験場というわけでもなく、日本の家屋のようだ。

「気が付いたようじゃな」

「…っ、誰だ！」

振り向くと、そこにはシスターの服を着た、腰まで掛かる長いピンク色の髪の少女がいた。

シスターという衣服を見て、育ての親である神父様の事を思い出すが、すぐにその考えを振り払う。

「何じゃ、せつかくわしが生き返らせてやったというのに。」

…まあ仕方ない、初めて会うのじゃからのう、島村ジョー」

その言葉を聞いた瞬間、ジョーはすぐに警戒した。

サイボーグ戦士として、長年戦い続けた結果、自身を知る者はそれ程多くない。

だからこそ、目の前にいる少女が敵の可能性という事も考慮し、警戒を強く、睨み付ける。

「っ！」

どうしてその名前を！」

「ほう、それは驚いておるな？」

…ふっふっふっ、何を隠そうわしは全知の神・オーデイン様じゃからな！」

「オー…、デインっ、まさかっミユートス・サイボーグの！」

それを聞くと共に思い浮かんだのはオリンポスの神々などを模したミュートス・サイボーグだった。

「違うっ！」

言っておくが、お前が思い浮かんでいる奴らとは全く違うわ!!

まあ、目覚めて早速ですまんがわしと来てくれ！」

「えっ、ええ!？」

ちよつと待ってくれ！」

ジョーは訳もわからないまま、オーデインもといひなという少女に手を引かれる形で家の地下に連れていかれた。

目の前にいる彼女からは自身に対してまるで敵意がない事もあるが、それでも警戒を続けながら、ゆっくりとついていく。

「君は、一体何者なんだ？」

僕は確か「死んだじゃろ？」あつああそうだ」

「おぬしがこの世界に来る前に世界を守る為に戦い続けたのは知っている。

そんなおぬしだからこそ、頼みたい事がある」

「頼み？」

「ああ、世界を救って欲しい」

「世界を、それは一体？」

「ああ、この世界は今、現在崩壊の危機に陥っている。

その原因はおぬしと同じく死んだ者達が原因だ」

「死んだ？」

「そんな、幽霊のような存在が」

「幽霊ではない。」

「転生者だ。」

彼らは、その身に宿った力を自身の欲望で蹂躪している。

それが原因で、世界は崩れかけておる。

だからこそ、かつて世界を救い、その命を散らしたおぬしには世界を守る存在、特命戦隊ゴーバスターズになって欲しいんじや」

「ゴーバスターズ？」

「まあ、その説明はこいつらと一緒に言うぞ」

ひなからの説明が終わると同時に、扉の前に立つ。

この扉に来る前の階段や通路もそうだが、地上の家屋とは違って、地下はまるで要塞のそれだった。

「ハイハイっ。」

「ここでやつらが待つておる。

…では開けるぞ！」

ひなが前に立つとセンサーが反応し、認識すると扉が開いた。

その先はモニターなど様々な機材があり、その奥には人一人が入れる大きさのカプセルがあつた。

それを囲むように、二人の人影と、ジョーとは違って、純粋なロボットを思わせる存在が3体立っていた。

「おお、お前がジョーか！」

よろしく頼むぜ!!」

そう言いながら、ジョーに近づいてきたのは、3体のロボットの内の一体だ。

見ればその顔はバイクのハンドルを思わせ、全体的にバイクを思わせるパーツが幾つかある。

「こいつはチダ・ニツク、ニツクと呼んでも構わん。

なんだつて、これからおぬしとパートナーを組むバディ・ロイドだからな」

「バディ・ロイド?」

「ああ、様々な状況を支援してくれる頼もしい存在だ。

今いる、他の二人にもそれぞれバディ・ロイドがおり、万全のバックアップをしてく

れる」

「お前の事は聞いているぜ。」

まあ、俺ができる事はなんでも頼ってくれ」

「あつああ、よろしく頼む」

そう言い、ニツクが差し出してくれた手に、ジョーもそれに合わせて握る。

手から伝わるのは機械だが、目の前にいる彼はロボットという事を忘れさせる温かみが確かにあった。

「それで、貴様が仲間入りするこやつらじゃが、まずはこっちの無愛想なのは不破諫だ」
「不破さん」

年齢を見る限り、ジョーよりも少し年上という印象を持つが、何よりも感じたのはその鋭い眼光だった。

「お前、サイボーグだと聞いたが、本当か」

「あつああ、本当だ」

「そうか」

それだけ聞くと、そのまま不破は離れた。

「彼は一体？」

「あつああ、ごめんね!!」

けど、不破も悪気はないから」

「えっああ!!」

そうしていると、今度は大柄なロボットが近づいてきた。

それはまさにゴリラを思わせるロボットであるが、不破を心配するように慌てた様子が見えた。

「こいつはゴリサキ。

深破のバディ・ロイドだぜ、結構心配性だけど、気にするな」

「そりゃ、気にするよ、ニツク！」

とにかく、不破をよろしくね！」

「あっああ」

そのままゴリサキもそのまま不破の方へと歩いて行く。

「変わった人だな」

「それはあなたも同じ」

「うわあ!?!」

そうしていると、後ろから声が聞こえ、振り返る。

見ればもう一人の少女で、黄色のメイド服を思わせる格好にジョーは驚く。

「この子は望月あざみ。」

こう見えて、忍者で、頼りになるよ。

そして、僕はウサダだよ、よろしくねえ」

「あつあぁ、よろしく」

「にん」

未だに驚きを隠せずにしたジョーだが、そのままあざみに握手をするように手を伸ばす。

それに応えるように、あざみもまた応え、そのまま握手をする。

「さて、ではそろそろ次のミツシヨンの説明をするぞ」

「ミツシヨンって、そもそもどうやって、別の世界へ行くんだ？」

「ふふつ、それは、このカプセルじゃ!!」

そう言い、見せたのは先程から部屋の中央に設置されたカプセル。

「これは？」

「簡単に言うとシユミレーターじゃ。」

だが、ただのシユミレーターではない！

「ここにはおぬしらの意識をデータに変え、他の世界へ転移させる事ができる」

「そんな事がっ」

「死後の世界があるんだ。」

これぐらいで驚くな」

その説明を聞き、驚きを隠せないジョーだったが、不破はため息を吐きながら言う。

「まあ別の世界と言っても、仮想世界じゃ。」

だが、仮想世界と言っても、それは本来の世界に突入し、未来を変える事ができる装置だ！」

「それは、一種のタイムマシンじゃないか」

「まあ、今はその解釈で十分だ。」

だからこそ、転生者との戦闘の時には気をつけて欲しい。

建物などはある程度問題ないが、死人が出れば、彼らはそのまま……」

「っ」

そこから、彼女の暗い表情で一瞬で理解する。

「分かった」

「良かった！」

それじゃ、これを」

そう言い、ひなが渡したのは腕時計を思わせるアイテムだった。

「これは一体？」

「モーフィンブレス、ゴースターズの証だ。」

こことは違う世界で活躍したゴースターズをモデルに開発した装置だ。

瞬時に戦闘スーツになるだけではなく、各々にあったワクチンプログラムという力も使えるようになる」

「ワクチンプログラム？」

「ああ、本来のゴースターズが使っていた力だ。

これから戦う転生者が転生特典というウイルスに対抗する為の力だ

まあ以上がわしからの説明じゃ。

何かわからんところはるか？」

「色々があるが、まずは現地に向かってどうなっているのかを知りたい」

「ふむ、まあ言われただけでは困惑するであろうな。

よし、では三人ともカプセルに入るが良い！」

三人がカプセルに入ると扉が締め、一瞬だけ体が浮くような感覚を覚え、意識がなくなつた。

「…っ！」

「…は！」

気が付くと、そこはビルが立ち並ぶ街だった。

「特異点だ、世界の崩壊の原因となる特典を確保しないとヤバイことになるぞ！」

「…んっ、あっ！

見つけた、あれ！」

あざみが指を指した先に、人と機械が合体したような存在の怪物たちが人々を襲おうとしていた。

「サイボーグっ」

そしてその奥で、その怪物たちを従えてる男が大きなハンマーを持ち上げて行進している。

「あれが、この特異点での転生者か」

『うむ、気をつけていくのじゃぞ！』

「ふっ、言われなくてもそうするだけだ！」

「うん！」

不破とあざみが左腕に装着されたモーフィンブレスを構えた。

ボタンを押すと二人の体は特殊なスーツに覆われていく。

『レッツモーフィン！』

掛け声と共にレンズが出現し、二人の頭を覆った。

その姿はまるでどこかの特殊部隊を思わせる姿であり、各々の色に合わせて、不破は青、あざみは黄色だった。

そして二人はそのまま怪物達に目掛けて走っていった。

「あれが、ゴースターズっ！」

いけないっ」

ジョーは戸惑いもあつて、変身する余裕もなくそのまま付いていくように走っていく。

そしてジョーは二人の戦いを見た。

「はあ!!」

青いスーツを纏った不破は銃を使って怪物たちを撃ち抜き、更には取っ組み合いになつてもすぐに持ち上げて投げ飛ばした。

「やっ!」

黄色のスーツを纏ったあざみは剣を逆手に持ち、ジャンプしながら怪物たちの急所を切り裂き貫いていく。

それを見ていたジョーは呆気に取られていた。

「す、すごい……!」

かつての仲間たちもそうであつたように、この二人も肩を並べて戦つてるようにも思えた。

だがそんなことを考えている時に、悲鳴が聞こえてきた。

「…っ、あれはー！」

ジョーが目にした先は、上空から飛んできた怪物が逃げ遅れた人たちの前に立ちはだかり、チェーンソーの腕を振り上げた。

「加速装置！」

奥歯を噛み、ジョーは加速装置を発動させる。

周りがゆつくりに見えるほど速くなったジョーは、そのまま怪物を蹴り飛ばし、すぐに解除した。

「ここは危険です！」

早く逃げてください！」

「あつ、ありがとうございますー！」
人々を逃がすのを見届けてると、どこからともなく鉄パイプなどの金属類が飛んでくる。

「くっ！」

「おいおい、何てことをしてくれてんだてめえ？」

怯んでいたジョーが顔を見上げると、そこには先ほどの男がいた。

それも周りに金属類を浮かせて。

「君がこの世界の転生者か！」

何故人を襲うんだ！」

「ふっ、そんなものな決まつてるだろ。」

俺は生前あれやこれやと働かされて過労死したんだ。

だからこそ、転生して自由になった今を謳歌したいんだよ」

「謳歌だど!？」

それが、関係のない人たちを巻き込んで暴れることなのか!？」

「おおそうだ。」

転生しても鬱憤が収まらないんでな。

…いやあ、こんだけ派手に特典を使うと、スカツとするつてもんだぜ！」

「なっ！」

つまり、目の前にいるこの男は生前も含む鬱憤を、何の関係もない人たちに八つ当た

りして発散しているのだ。

何の罪もない人たちを。

それだけで、ジョーは怒りに拳を握り締めた。

「ふぎけるなっ！」

「あ?！」

「どんなことがあるうと、彼らは何の関係もない人たちだ！」

それを、簡単に傷つけることは、それは絶対にあつてはならないことだ！」
「ほう、随分と吠えるじゃないか」

ジョーは男を睨み付ける。

転生してから、色んなことがあつて戸惑いを隠せなかつたが、今ここに戦う理由があることを理解した。

「僕は…、例えこの世界が特異点で、終われば全てが元通りになる世界だとしても、今ここで生きている人たちをお前たちから守るために戦う！」

ジョーは覚悟を決めて、左腕のブレスを構え、操作する。

『イツツモーフィンタイム！』

「レッツモーフィン！」

ジョーの体が、赤いスーツに覆われていく。

そしてさらに操作することで完全に頭も覆われて変身は完了した。

「あれは！」

「どうやら、変身したみたいだな」

遠くで怪物たちを倒しながら見ていたあざみと不破も、そう言った。

「変身しただと!?!」

「なら、こいつらで遊んでやるよ！」

男は驚きながらも、怪物たちを呼び寄せ、襲い掛かりながら、自身も鉄を飛ばして行く。

「ふっ！」

ジョーは怪物たちの攻撃を軽くあしらひ、鉄をかわしていく。

そして距離を取ってから奥歯を噛み、加速装置を発動する。

周りの動きがゆっくりに見えるくらいに、ジョーの動きが速くなる。

そして、その凄まじいスピードでもって、鉄を破壊し、あざみのを真似て、怪物の急所を拳と蹴りで破壊していく。

「なっ!?!」

それと同時に加速装置は解除され、飛ばした鉄が破壊され、怪物たちが倒れていることに、男が驚く。

だがジョーも一撃で怪物たちを倒せたことに驚いていた。

「まさか、この姿になると、身体能力も上がるのか」

「くっ、何をしたか知らんが、これでも喰らえ!!」

ハンマーを高く上げ、先端に鉄が集まり巨大な鉄槌となる。

そして振り下ろされる鉄槌を、反射的に避けようとした時だった。

「えっ!」

まだ加速装置を発動していないのに、それに近い速度で避けたのだ。

「今のは、一体？」

『ふっふっふっ！』

どうじゃ驚いたであろう？

それが貴様に与えられたワクワクプログラムのかじや！

貴様には、その驚異のスピードを付与されておるのじや！』

「この声は、ひな!？」

『今貴様のモーフィンプレスを通して通信しておるのじや。』

それはさておき、胸元のボタンを押してみるが良いぞ?』

「ボタン？」

…っ、これか!』

『トランスポット!』

プレスからのひなの通信の通りにボタンを押すと銃が現れる。

「これは…!』

『そうじゃ!』

それが貴様らゴースターズの武器の一つ、イチガンバスターじや!』

「イチガンバスター…。」

なら、これで！」

イチガンバスターを構え、ジヨースは男を撃ち抜く。

「ぐっ!？」

くうっ、調子に乗るな！」

『イツツタイムフォーバスター!!』

「はあ！」

男が巨大な鉄槌を振り下ろすが、ジヨースはイチガンバスターを操作し、強力な一撃で鉄槌を打ち砕く。

「な、何い！」

この、調子に乗るなっ!？」

男がワナワナと震えながらハンマーを構えるが、足元にクナイと銃撃が飛んでくる。

そこへやってきたのは不破とあざみだった。

「悪いがこいつだけが相手だとは思うなよ？」

「後は貴様だけ、覚悟召されよ！」

「不破、あざみ！」

「おう、遠目でも見させてもらったが、中々やるな。

まだまだこれには慣れてねえみたいだが」

「でもすごく速い！」

あざみでもそこまでできないのに！」

「こいつら調子に乗りやがって……！」

怒りが頂点に達した男を中心に、大量の金属が集まってきて、それが巨大なゴーレムとなる。

「はっ、でかくなれば良いってもんじゃねえだろう？」

「黙れっ!!」

貴様らもう許さんぞ！

肉片も残さず捻り潰してくれるわ!!」

「くっ、あれだけ硬いとさっきのが通りそうにないな」

「だったら、それ以上のやつをやれば良い。」

おい、お前もソウガンブレードを出しな」

「えっ、ああ……」

不破はそのままジョーと同じく先程と同じようにボタンを押すと、細長いブレード・ソウガンブレードが出現した。

すでに手元に用意していた不破とあざみがバスターとブレードを合体させる。

「よしっ『ジョー、待つんだ』えっ?」

『お主にはこつちを使つて欲しい』

それと共にジョーの手元に現れたのは不破達とは違う小柄な万能ナイフを思わせる物だった。

一瞬疑問に思つたが、その万能ナイフに刻まれた数値を見る。

「004つ！」

『ジョーの為に開発した7つのバスターギアの一つ、アルベルトマイティだ。』

残念ながら、001こと、イワンの能力の再現は今は難しい』

「いやっ、ありがとう」

例え、その姿が見えなくても、彼らが一緒に戦つてくれる。

そう思わせ、涙を流しながら、まるで手慣れたようにアルベルトマイティを操作し、イチガンバスターと合体させ、そのまま狙いを定める。

『イツツタイムフォースペシャルバスター!!』

「これで終わりだ!!」

それと共に不破、あざみから放たれた一撃はゴーレムの身体を打ち抜き、巨大な穴へと変わる。

同時にジョーもそれに合わせて引き金を引くと、巨大なミサイルとなつて、その穴に向かつて飛び込む。

「ぐっ、ぐおっ!？」

そんなバカなっ、この俺が！

こんなゴミどもにい…!!」

穴の中に入り込んだミサイルはそのまま爆散し、そのまま姿を維持できなくなり、ゴレムは崩れ落ちて、鉄の塊へと戻る。

そして不破が鉄の塊に手をつ突つ込むと、先ほどの男を引きずり上げると、ブレスを操作した。

すると男から光が飛び出し、それが不破のブレスに吸い込まれる。

「…これで任務完了だ。」

ほら、撤収するぞ…」

「…うん、そうだね」

「…」

そう言つて不破はその場を後にしようとし、あざみもこの世界が修正されてなくなることを知ってるから、少し暗い顔になりながら着いていこうとする。

「これで、良かったんだな」

それと共に見た光景は先程まで自分が戦っていた場所だった。

転生者との戦いの影響もあり、ボロボロになった街だったが、互いに命を助かった事

を喜び合っている彼らの姿を見ると、ジョーは笑みを浮かべていた。

「んっ、何が言いたいんだ？」

「この世界が、例え特異点を模した仮想空間で、元凶の特典を確保すれば、後は何事もなかったかのように修正されて元通りになろうとも、僕にはこの世界が現実で、だからこそ忘れられないよ。」

それに、これで世界も元通りになるのだから」

「…まっ、だったらお前はこの光景を忘れるなよ。」

これが、俺たちにとっての日常茶飯事だからな」

「ああ、もちろんさ」

「…そうだよね」

ジョーの言葉に、空を見上げながら頷く不破と納得してるのか表情が少し明るくなるあざみ。

「んで、お前も転生してあれこれあったが、これからどうするつもりだ？」

「ここから先は自分で決めろ」

「…僕は」

ジョーは一息置いてから、改めて二人を見る。

「僕は、これからも君たちと戦うよ。」

でも、例え特異点であっても、そこに住む人たちを守りたいんだ」
「ふっ、そうか。」

じゃ、よろしくな」

「よろしくね、ジヨー！」

改めて三人は、歩き始める。

世界の崩壊を防ぐために、その原因となる特異点を修正するために。

己のルール

ジョーがゴースターズになって数日が経つ。

バスターギアの扱いにも慣れてきたし、特典について調べたりして把握はしているが、まだ皆とは打ち解けあっていない様子だった。

あざみは普段偵察と言ってどこにいるのかもわからない上、ひなも特異点が察知すれば真面目になるが普段はゲームなどをして遊んでいる。

ゴリサキやウサダはともかく、相棒のニツクはバイクに変形できるが方向音痴なのが難点だ。

不破は普段地下にあるトレーニングルームで体を鍛えるか訓練室で射撃の練習をしている。

「不破さん、少し良いか？」

「何だ？」

そんな中でジョーは不破に話し掛けた。

不破は話し掛けられても気にする素振りも見せずに、明らかに重いダンベルを持ち上げて鍛えている。

「前に僕がサイボーグだって聞いた時、君はどう思ったんだ？」

「別に」

「え？」

「お前がサイボーグでも、お前自身が人を傷付けるわけでもないし、むしろ人を守るために戦ってたんならそれで良いだろ」

「そうか。」

「…まだここにいる全員に聞いたってわけではないが、君もサイボーグだったりするか？」

「ある意味では、な」

「ある意味？」

「どういふことかと思った瞬間、警報が鳴り響いた。」

「これは」

「どうやら特異点が見つかったらしいな。」

「行くぞ」

「あ、ああ！」

「ジョーと不破は地下へと向かう。」

「その先ではすであざみも来ており、ひなたたちも待機していた。」

「おっ、来たか二人とも！」

待っておったぞー！」

「あざみも、準備満タン」

「特異点が見つかったんだろ？」

なら、早く行くぞ。

今回は前みたいに待たないからな」

二人に見向きもしないまま、不破はそのままカプセルの中へ入ろうとするが、ひなが止める。

「まあ待て不破、その前に説明を聞け」

「あ？」

「実は今回の特異点には特殊な反応があつての」

「特殊な反応？」

「何なの、それ」

「おぬしらはアンデッドという存在を知っておるか？」

「確か仮面ライダー剣に出てくる不死の生物にしてその生き物たちの祖、だな？」

「うむ、話が早いのお」

「で？」

その特殊な反応ってのが、アンデッドってやつだったのか？」
「そう言うわけじゃ。」

今回の特異点は仮面ライダー剣とは無関係の世界なんじゃが、何故かアンデッドの反応があるんじゃないよ」

「でもひな、アンデッドの反応って、そのアンデッドは何？」

もしジョーカーアンデッドだけなら、不味いことになってる」

あざみは少し不安そうにひなに質問した。

仮面ライダー剣に登場するアンデッドにはバトルファイトというものがあり、それ最後まで残ったアンデッドはその生き物の祖先として支配できる。

だけどジョーカーアンデッドの場合はそういう訳にはいかず、最後に残るとダークローチという怪物を召喚して、世界を滅ぼしてしまうからだ。

「…ふむ、さすがにわしもそこまではわからん。」

だから貴様らには特異点に向かって調査をして欲しいのじゃ」

「ふん、どつちにしろ特異点が見つかってる時点でもねえのは確かだ。」

「…ほら、もう行くぞ」

「もう不破つたらまたそんな無愛想なことを言ってる…」

「…確かに、不破さんの言うとおり、どんな事情があるのかわからないけど、特異点が世

界が滅びる原因になってしまふなら、放つてはおけない。

ひな、僕たちは行つてくるよ！」

「うむ、三人とも頼んじやぞ!!」

二人は素つ気ない態度を取る不破に着いていくようにカプセルの中へと入っていく。それを確認したひながカプセルを起動させて、三人を特異点に向かわせるのだった。

「…っ、特異点に着いたようだな」

「でも、どこにアンデッドがいるんだろ?」

「知るか、そのために俺たちの足で調べるんだろ…!」

おい、どうやらその原因がいるらしいな」

特異点に着いて、調査を始めようとした途端に不破が何かを見つけた。

視線の向こう側、人々が行き交う街で黒い怪物たちが人を襲い始めている。

「あれは、ダークローチ！」

「ということは、まさかこの世界にジョーカーが！」

「何がどうなってるんだ！」

「…とにかく、ここで奴らを倒すぞ！」

「うん！」

『イツツモーフインタイム!!』

『レッツモーフイン!!』

三人がブレスを使って変身し、人々をダークローチ引き剥がしながら、ダークローチを倒していく。

「くっ、数が多い！」

「下がって！」

…望月流忍法 無双手裏剣！」

ダークローチの群れの中に飛び降りたあざみが周囲に向けて手裏剣を投げつけ、最終的に爆弾を投げて爆発させ、ダークローチを倒した。

「ふう…、この辺りは倒せたみたい」

「ああ、こつちも何とか避難できたよ。」

…そう言えば、ダークローチもアンデッドとしての反応があったという情報を調べた

ことがあるけど、まさか……！」

「きゃあ!!」

瞬間、三人に目掛けて雷撃が飛んできた。

三人は受け身を取って飛んできた方向を見ると、そこには鎧を纏った怪物がいた。

「ちっ、今のでくたばらなかつたか」

「君がこの世界の転生者か！」

「何故僕たちに攻撃を！」

「あ？」

「んなもん決まってるだろ！」

折角ダークローチどもを操ってこの世界の人間ども全員をぶっ殺して俺だけの世界に塗り替えようとしたのにお前たちが邪魔したからだろうが！」

「その言い方だと、あのダークローチはてめえの仕業ってか？」

「ああそうだ！」

俺の特典は、このアナザーブレイドへの変身とその能力、そしてダークローチどもを召喚し、操ることができることだ！

俺はこの力を使って、気に入らねえやつらを全員ぶち殺してやるんだよ！」

「何ということを！」

「ひどいー！」

「…はっ、下らないな」

「…あ？」

不破が、男の言葉を一蹴し睨み付ける。

「お前はさつき、気に入らないやつらを殺して、自分だけの世界に塗り替えると言ったな？」

だが、その先に何がある？

お前は一体、何のために力を奮うんだ？」

「だ、黙れっ!!」

俺に対して舐めた真似をするやつらなんか皆死ねば良いんだよっ!!

これまで、そしてこれからもな!!」

「呆れて物も言えねえな。

だが、これ以上人を襲うってんなら、お前をぶっ倒してやるよ!!」

「こいつ、舐めた口聞きやがって!!」

ぶち殺してやるよ!!

出てこい、ダークローチども!!」

「島村、あざみ！」

お前らはダークローチをやれ！

俺はあいつをぶっ倒してくる！」

「わかった！」

「任せて！」

男、アナザーブレイドの影から出てきたダークローチたちを、ジョーとあざみが立ち向かい、不破はアナザーブレイドにバスターを撃ち込みながら肉薄する。

「うおおおおおおお!!!」

「ふっ、舐めんなあ!!!」

アナザーブレイドの大剣を一度はバスターで防ぐもすぐに弾き飛ばされてしまい、その後間髪入れずにその大剣が振り下ろされる。

「ふんっ!!」

だが不破は負けじとその大剣を白羽取りする。

それでも威力が高いのか、反動で不破の足元がめり込む。

「ははははははははっ!!!」

このままてめえを真っ二つにしてやるぜえ!!」

「上等だ、やれるもんならやってみる！」

その前にこんなもんへし折ってやる！」

白羽取りしている手に力を込めて、徐々に押し返す。

しかもそれだけでなく、大剣の刃を横に力を込めていく。

「無駄だつ、こいつは鋭い上に堅いんだ！」

お前にへし折られるかよ!!」

「俺がやると言ったらやるつ、俺がルールだあ!!」

ぬおおおおおおおおおおおおお!!」

「ぐつ、うおつ!？」

徐々に押し返されただけでなく、大剣の刃の根元からヒビが入る。

そして。

「うおおあああああああつつつつつつ!!」

バキーンと、大剣の刃が根元から折れてしまう。

アナザーブレイドも、その光景が信じられないとばかりに目を見開いていた。

「ば、バカなっ!？」

「不破、まるでゴリラみたい…!」

「不破さんのあの力、何て怪力なんだ！」

「…005を思い出すな」

「うっせえつ、誰がゴリラだあ!？」

その様をダークローチを倒しながら見ていたあざみとジョーはそれぞれで驚いていた。

あざみは率直もといどストレートにゴリラと言ひ、ジョーはかつての仲間のことを思い出していた。

不破はあざみにそう怒鳴りながらへし折った大剣の刃を捨てて、アナザーブレイドをバスターで撃ち抜く。

「ぐうつくつ、まだだ！」

俺の特典のアナザーブレイドは、ブレイドが封印したアンデッドの能力が使えるんだ。

「今俺はその中でも堅くなるやつを使ってるから効きやしねえんだよ!!」

「ちっ、めんどくせえ能力だな！」

『トランスポート!』

その音声と共に、右腕の肘から先が巨大な杭の付いた籠手・パイルドライバーを装着した。

「これでも喰らいやがれえ!!」

「ぐほあっ!？」

アナザーブレイドを殴った瞬間、パイルドライバーの先端から巨大な杭が凄まじい衝

撃と共に撃ち込まれ、それに耐えきれず、アナザーブレイドが装甲が粉々になりながら吹き飛ばされる。

「がはっぐうっ、頭に来るぜ!!」

「はっ、ずいぶんと安い怒りだな！」

…本当の怒りがどんなものか、教えてやる!!」

『イツツタイムフォーバスター!!』

すぐさまパイルドライバーを操作し、巨大な杭の先端をプラズマ化させて勢いよく射出した。

アナザーブレイドもそれに対抗するように電撃を浴びせようとしますが、杭の威力によつてそれらが掻き消され、そのまま、アナザーブレイドの体を突き刺さり、吹き飛ばした。

「ぐっはあああああああ!?」

そのまま建物の壁にめり込むように激突し、変身が解けて人間の男性の姿に戻りながら地面に倒れ込んだ。

ダークローチもアナザーブレイドが倒されたと同時に一瞬で全て消滅した。

不破は倒れた男に近付き、プレスを操作することで特典を回収した。

「ぐっううっ…!」

何で、この俺が、お前みたいなやつに負けるんだ…？」

「ふん、決まってるんだろ。」

俺には夢があるんだ。

平和を守る、仮面ライダーという夢がな。

だからためえみたくないやつに、負けるわけにはいかねえんだよ。

…まつ、今はそつちには変身できねえけどな」

「クソ、が…」

男は悔しそうにそう言つて、今度こそ気を失つた。

そこへ、ジヨーとあざみが駆けつける。

「不破さん！」

「不破、やつつけたんだね！」

「ああ、おかげさまでな」

「でも不破さん、まさか素手であの剣をへし折るなんて。」

やつぱり、不破さんもサイボーグに」

「違うな、あれは俺自身の力だ。」

それに、サイボーグって言うには俺の場合は少し特殊だからな。

それと、この際お前たちは覚えておけ、俺は確かにゴースターズの一員として一緒

にているが、俺は俺自身のルールに乗っ取ってここにいる。

だからひなが気に入らねえこと言ってくるようであれば、俺はそれには従わねえ、良いな?」

「不破さん…」

ジョーは、そんな不破の背中を見て、一匹狼の気質がありながら、自分の中に確固たる信念と正義を持っているのだと、確信を覚える。

「うーん、不破って一匹狼なのかゴリラなのか、よくわからない」

「はあ〜っ!」

おいあざみっ、誰がゴリラだコラあ!」

「だっていつもゴリラ押しだし、力付くで袂し開けようとするもん!」

「おい待てよコラあ!!」

「ああ二人とも落ち着いてくれ!」

文字通りゴリラが威嚇するように怒る不破に、ジャンプしながら逃げ回るあざみを、ジョーは必死で落ち着かせようとするのだった。

高く翔ぶ刃

「…っ、特異点に着いた！」

ジョーたちは特異点に辿り着いた。

事前にあつたひなからの情報だと、この特異点のどこに出ても襲われる危険性があるとのことだったので、周囲を警戒する。

「本当に、この特異点に転生者が」

「知るか、さつさと見つけて…。」

ちっ、何だ蠅か鬱陶しいな…」

「不破、ちゃんと洗った？」

「さつきシャワー浴びてきた所だ！」

「いや待って！」

「これは…！」

特異点に辿り着いて、ジョーは異変に気付いた。

三人の周囲が、すでに蠅を始めとする飛ぶ虫たちに囲まれており、襲い掛かってきた。「な、何だこいつらは！」

「わからない、でもこれ尋常じゃない！」

「くっ、こうなったら！」

「…力を貸してくれ、006！」

『トランスポート！』

音声と共に、ジョーは時計型のバスターギア、チャンコタイマーを手に取り、虫たちに向けて炎が吹き出し、虫たちを追い払いながら突破する。

「ふう、何とかなったな」

「しかし、今のは何だったんだ？」

「…っ、危ない!!」

今度はあざみがジョーたちの前に躍り出て、両手のクナイを使って飛んできた何かを弾いていく。

弾き返され地面に突き刺さったそれは、剣だった。

「どこから！」

「あつはははははははっ!!」

いきなりネズミが入り込んだと思ったら中々やるのがあるのね！」

空を見上げると、そこには鎧を纏い大量の剣でできた翼で飛んでいる少女がいた。

「その言動から察するに、さっきの虫たちもお前も仕業か」

「ふふっ、ええそうよ？」

私の特典は虫を始めとする空を飛ぶ生き物を支配下に置くことができるの。

それに見てみなさいよ、これを！」

「…っ、これは！」

「はいっは！」

「ひ、ひどい！」

少女が指を指した方向を見ると、虫だけでなく鳥ですらも執拗に人間に襲い掛かってきた。

大勢の人たちが逃げ惑い、建物のドアを閉めたり、バリケードを作ったりして避難しているが、決じ開けられるのも時間の問題だった。

「どう、すごいでしょ？」

人間ってこういう風にしたら皆恐怖に満ち溢れていくのよ、こうして避難しても、いつ来るのかわからない恐怖に怯えて、ふふっ後で虫や鳥たちが通りやすいように決じ開けて、なぶり殺しにされる様をカメラにでも収めようかしら？

「…ねえ、とつても楽しいでしょ？」

「…ない」

「はっ?！」

鋭い目付きで、あざみは少女を睨み付ける。

「こんなこと、許される訳がないっ！」

ここが特異点でも、ここにはここで生活をしている人たちがいる！

そんな人たちの生活を、平和を、貴様一人のために恐怖に塗りつぶされてはいけ
ない！」

「へえ、何そこのお子ちゃま？」

「この私に楯突くつもり？」

「お子ちゃまじゃないっ！」

あざみは、ゴースターズの一人にして忍者だ！

……ここが帝都でないにしても、私のやることは変わらない！

覚悟召されよ！」

「……っ、お子ちゃま風情が、生意気言うんじゃないわよ！」

「はっ、そのお子ちゃまに怖じ気づいてる時点で、お前はその程度だろうが」

「それに、君がどういいうわけがあつてこんなことをしているのか、未だにわからない。

でも、これ以上君のために被害は出させない！」

『レッツモーフィンタイム!!』

『レッツモーフィン!!』

ジョーたちはブレスを操作し、変身を完了する。

「レッドバスター！」

「ブルーバスター！」

「イエローバスター！」

「バスターズ、レディー・ゴー!!」

名乗りを終えて、三人は散開しながら少女や、襲われてる人々の元へと走り出す。

「ふんっ、たかがネズミの分際が！」

「これでも喰らえっ!!」

少女が放つ剣を、三人は弾き返しながら人々を助け出す。

「ふんっ、人助けしながらだなんて、ずいぶんと余裕ね？」

「お前こそ、いつまで余裕ぶってるんだ？」

「当たり前じゃない、私が近寄らずとも、こうすれば！」

翼を勢いよくはためかせると、大量の剣が降ってくる。

先程の降ってきた剣はこれだったのだ。

「くっ、さつきよりも多い！」

「しかもこの剣、ただの剣じゃねえ！」

「何かヤバイ感じがする！」

「ふっ、気付いたようね！」

そうよ、私の特典は虫や鳥と言った空を飛ぶ生き物を支配下に置くだけでなく、ハイスクールddの『魔剣創造』の亜種禁手『魔刃の鋼翼鎧』というものよ！

だからあんたたちが近付けても、この無数の魔剣の鎧と翼で切り刻まれるだけ！
わかったかしら!?!」

「はっ、そんなもん、力付くで引きずり下ろして、袂に開ければ良いだけの話だ！」
「でも不破、こっちの攻撃が届かないし、そんな力押しだけじゃダメ！」

「ここはあざみが！」

そう言うにあざみはずごい勢いでジャンプし、建物の壁をも蹴ってジャンプし、少女との距離も縮まる。

「覚悟っ！」

「ふふっ！」

あざみのブレードが少女を捉えるが、少女の翼がそれを防ぐ。

「ちいっ！」

「そんななまくらで、私の翼が通るとでも？」

「…ふんっ！」

「くうっ！」

あざみはそのまま弾き返されて落ちていくが、それでも他の建物に着地してはすぐにジャンプして攻撃しようとする。

だが届かないにしてもクナイを投げても弾かれるし、届いても先程のように弾き返されるか避けられるかで、攻撃が当たらない。

「くっ!」

「いい加減鬱陶しいわねチビ。」

そら、チビはチビらしく地面に這いずってなさいよっ!!」

「きやつ!!」

「あざみ!」

「あざみい!!」

『トランスポート!』

少女に叩き落とされ、地面に落ちようとした時、ジョーはあざみを助けるために滑り込みながら受け止める。

「大丈夫か!?!」

「う、うん…、ありがとう」

無事を確認するが、その後で見上げると、少女がジョーたちを嘲笑うかのようにさらに高いところまで飛び上がっていた。

「くっ、あいつバカにしゃがって！」

「でも、どうしよう…。」

あざみでもあんな高くまで跳べない。

仮に跳べても、あいつに攻撃が防がれる」

「いったいどうすれば…！」

…そうだ、二人とも、僕の話聞いてくれ！」

ジョーがあざみと不破に作戦を説明した。

「…おい、それで行けるのか？」

「大丈夫だ。」

僕たち三人で力を合わせれば！」

「何をこそこそと話をしてるの？」

もしかして命乞いかしら!？」

「違う、今からあなたを倒すための作戦！」

…望月流忍術 奥義 無双手裏剣!!」

あざみが弾幕を張るように手裏剣を投げ、剣を弾き返した。

『トランスポート!』

そしてその音声と共に、あざみの両手に黄色の籠手・ガングニール・タイプHが装着

される。

「不破、ジョー、足場になって！」

「良いだろう」

「わかった！」

∴力を貸してくれ、005！」

『トランスポート！』

ジョーは両手に手袋型のバスターギア・ジェロニモグローブを装着し、不破と共にバレーボールのトスのような構えになると、あざみが二人の手に乗った。

「外すなよ!!」

「承知！」

「はあ!!」

「ぬうああああああああああ!!!!」

すごい勢いで打ち上げられるあざみの体。

ジェロニモグローブで腕力を強化したジョーと、不破のパワーと、あざみのジャンプ力により、少女の元へと真っ直ぐ飛んで行く。

「なっ!?!」

「くっ……!」

少女はあざみを撃ち落とすために、剣を飛ばした。
しかし。

『イツツタイムフォーバスター!!』

その音と共に、別方向からの攻撃により、剣が全て吹き飛ばされる。

「えっ!?!」

攻撃が来た方向を見ると、ジョーがアルベルトマイティを装着したバスターを構えていた。

「悪いけれど、あざみの邪魔はさせない!」

「ありがとうジョー!」

…では、覚悟召されよ!!」

『イツツタイムフォーバスター!!』

ガングニール・タイプBを操作し、両手を突き出すと、先端がドリルに変形し、高速で回転する。

「ちいっ!!」

少女はせめてもの抵抗とばかりに剣が集まった翼を前に出し、防御に入った。
間もなくして、あざみが翼に激突、先端のドリルが火花を散らす。

「行けー！ー！ー！っ！っ！っ！っ！
!!!」

あざみに呼応するように、ドリルは勢いを増す。

そして、翼が輝が入り、あつという間に翼が粉々に砕け、そのまま少女の体を貫いた。「がはあっ!?!」

鎧が完全に砕け、そのまま地面に落ちていくが、ジョーが受け止め、あざみはそのまま着地する。

そして特典の回収を終えると、今まさに人々に群がろうとしていた虫や鳥たちが、そのままそっぽを向くかのようにどこかへ飛び去っていった。

「これにて一件落着!」

「ふう…、だな」

「彼らも無事で良かった…」

三人は危機が去って喜ぶ人々を見る。

「さて、ここも無事終わったわけだし、そろそろ戻るか」

「承知!」

「ああ、そうだな」

三人はそんな人々を背に、元の世界に戻るのだった。

あざみは忍者

「この特異点のどこかに、その転生者がいるんだよな」

ジョーたち三人は特異点に着いてから、散策をしていた。

一見何の異変もない様子ではあるが、ひなからの事前の情報では、この特異点ではどういいうわけか子供が異様に少ないようで、これは転生者に関係しているのではと考えて調査することになったのだ。

「…さっきまで聞いた人たちの話から察するに、夜とか暗い所で子供たちが消えたって言うんだよな」

「それに、警察でも捜査は難航してるって。

…だけど、子供が誘拐された場所にはクモの糸みたいのがあったって」

「そう考えると、それは偶然ではないのかな」

「なら、その現場に行ってみよう」

そうして三人は子供が誘拐されたという現場に向かった。

「あつた」

「本当に、クモの糸があるのか」

「クモなんてそこら辺にいるが、これじゃ見分けがつかねえな」

「だから解析する必要がある」

『アナライズモード！』

あざみはブレスを操作し、ボタンの横のカメラ部分が写したクモの糸を解析している。

「…うん、やっぱりこれ、転生者の特典の反応がある。」

「データを、ひなたたちに転送する」

「そうか。」

「…ひな、今あざみがそっちに転送したから、そちらで転生者の反応を追えるか？」

『うむ、任せろ！』

あざみがデータをひなたたちに送ってから、すぐにひなたたちがそのデータを元に案内をされ、辿り着いた先は大きな廃墟だった。

「この中に転生者が」

『ああ、反応から察するに。』

「じゃが、中に誘拐された子供が居るやもしれんから、慎重にな」

「なら、ここはあざみが。」

「…里の掟 42条 謎は謎のまま捨て置くな」

「んっ、それは？」

「あざみの故郷に伝わる108の掟の一つ。

あざみは日々忍者として、この掟を守ってる。

では、何かあり次第連絡するから、これにて御免！」

その場から飛び上がり、あざみは姿を消した。

「…前々から思ってたけど、あの身のこなし、本当に忍者なんだ」

「関心してる場合かよ。」

あいつが中に入ったんなら、俺たちは外から調べるぞ」

「わかった」

そうしてジョーと不破も、廃墟の外を調べるのだった。

廃墟に入ったあざみは、暗い通路や天井裏などを通りながら進んでいた。

「…っ、あれは！」

天井裏のダクトの蓋の隙間から、子供たちが監禁されているのを見つけた。

見た感じは食糧などを提供されてるようで、無事ではあるようだが、その顔は怯えている。

中には家族に会いたくて泣いている子供もいた。

「ひどい…、早くあの子達を解放しなきゃ『待つて、あざみ！』…ウサダ、どうして！」
蓋を開けて助けに行こうとした途端、ウサダからの通信で止められる。

『君の言う通り、あの子達を助けるのは優先すべきことだよ。』

でも今ここで動いたらマズイ！

この建物自体が特典の反応があつてわかりにくいけど、もしかしたら、近くに転生者がいるかもしれない！』

「じゃあ、一体どうすれば…」

『待つて、この建物をスキャンしてみる。』

…あざみ、その通路の先にある部屋に、鍵がある。

それにその部屋には警報ボタンもある。

幸いここは電気が通つてるみたいだから、鳴らせるはずだよ』

「なるほど、それで敵の注意を引くってわけだね。

承知！」

直ぐ様通路を通つて、指示された部屋へと入るあざみ。

「あつた、鍵！」

∴後はこれを、ポチツとな！」

部屋にあつた警報ボタンを押すと建物全体にけたたましいサイレンの音が鳴り響き、すぐに出て子供たちが閉じ込められている部屋へと駆けつけ鍵を開ける。

「ひっ!？」

だ、誰！」

「落ち着いて！」

私はあなたたちを助けに来た！」

急いでここから出て！」

外に出れば私の仲間がいるから！」

突然のことで困惑している様子だが、子供たちは覚悟を決めたのか、互いに首を縦に振つて、ドアから急いで出る。

「あうっ！」

だが、その最後に残っていた女の子が躓いてしまい、足を擦りむいてしまう。

「うう」

「大丈夫!？」

「…待ってて、すぐに手当てするから」

すぐに袖口から包帯を取り出し、それを足に巻いて治療を終える。

「うん、これで大丈夫なはず。」

「さ、早くここから出よう」

「う、うん！」

「ありがとおおねーちゃん！」

あざみが女の子の肩を担いで出ようとした時だった。

『あざみ、後ろだっ!!』

「っ！」

「君も『家族』だ！」

ウサダからの通信もあつて、後ろにいたフードを被った男の攻撃を防いだ。

「何奴！」

『気を付けろ、そいつは転生者だ!』

「はあ、せつかく子供たちを集めてたのに、どうしてこんなことをしちゃうのかな？」

「…その言動から察するに、子供たちを誘拐していたのはあなた。」

何故こんなことを！」

「誘拐？」

ひどい言い分だなあ。

俺はただ子供が大好きなんだよ、子供で遊ぶのがな。

だから子供たちを集めて、俺の『家族』にして、ここを俺の楽園にするんだ！」

「子供で遊ぶ？」

何を言っている！」

「ふふっ、決まってるじゃないか。

君たち子供でもわからないことさ。

でも、生前でもやってた、とっても楽しいことなんだ！」

だからここ数日掛けて子供たちを集めて、楽園を築いて、そうして延々と楽しむんだ

！

ここに集めたたくさんの子供たちで遊ぶんだ！

んんん、楽しいぞ、生前の百倍は楽しいぞ！

子供たちで遊んで、気持ちよくなって、まさに一石二鳥だ！」

「こ、この人何を言ってるの？」

怖いよ……」

「下がって！」

…あなたの言っていること、よく分からない。

けど、あなたのそれはこの子達にとって絶対に良くないことだつてことには変わりはない！」

女の子同様に、男の言っていることを理解できないが、少なくともここに捕まっていた子供たちにとって良くないことだと理解したあざみはクナイを構え、女の子を庇うように立つ。

「はあ、しょうがないな。」

子供はちゃんと綺麗な状態で捕まえたいけど、わからせるつてことなら、良いよね？」

「…っ、危ない！」

すると、男の手首から糸の束が飛び出し、二人に覆い被さろうとするが、あざみは女の子を庇いながら避ける。

「大丈夫？」

「う、うん！」

「ここは危ないから、後ろに下がって！」

「わかった！」

『イツツモーフィンタイム！』

「レッツモーフィン！」

あざみは女の子が下がったことを確認し、変身してから攻撃を仕掛ける。

「ふっ！」

男の指先から出た糸をブレードで斬ろうしたら弾かれる。

直ぐ様身を翻して避けると、床に鋭利な刃物で斬られたような切り口ができていた。

「この糸、ただの糸じゃない！」

「ふふっ、そうだよ？」

俺の特典は鬼滅の刃の累やその家族の力を使うことができるんだ。

だから、こんなことも」

「……っ！」

周辺から、人間の頭を持つ蜘蛛たちが姿を現した。

「この蜘蛛たちは！」

「ああ、今まで君みたいに侵入してきたバカな連中に毒を打ち込んで蜘蛛に変えてあげたんだ。

…あつ、でも君は子供だからそんなことはしないよ？

せいぜい足止めのつもりでね？」

「人を蜘蛛に変えるだなんて、何たる外道！」

「ひどい言い分だなあ、俺はただ俺の樂園を作りたいただけなんだよ。

それを邪魔するバカな奴らには当然のことをした、それだけだよ。

…さつ、おしやべりは終わりだよ」

瞬間、蜘蛛たちの口から針の付いた糸が飛び出し、あざみを捕らえようとする。

あざみは周囲から来るそれを避けていく。

「あつ、そうだ！

さつきから後ろに隠れている君は、先に捕まっちゃおうねー！」

「えっ?」

瞬間、女の子に目掛けて、糸の束を飛ばした。

「…っ、危ない!!」

「きやつ、おねーちゃん！」

あざみが女の子を突き飛ばし、糸の束の繭に閉じ込められてしまう。

「あーあ、自分から捕まっちゃうだかなくてバカだなあ。

…まあいいや、その中には溶解液があるから、その服が溶けるまで待つててあげるよ」

「そんな時間、あなたにやる必要はない！」

「えっ、ぐはあつ!?!」

振り返るとそこには閉じ込めたはずのあざみが、男の顔面を蹴り飛ばした。

「ど、どうして、君はさっき閉じ込めたはず！」

「これぞ、望月流・変わり身の術！」

「まさか」

繭がバラけると、そこには溶け掛けの小さな丸太があった。

「あの子を庇ったからって、あざみは捕らえられない！」

「くっ、仕方ないな。」

少し、痛い目にあってももらわないと、わかんないみたい、だっ!!」

そう言うのと男の背中が割れて、その下から体の筋肉が膨張し蜘蛛の顔をした異形の怪物になる。

「ひっ、化け物……！」

「悪いけど、この姿になったからには加減はできないんだよねえ!!」

「どんな姿であろうと、倒すべき敵であることに変わりはない、覚悟召されよ！」

『あざみ、これを使ってくれ!』

「承知！」

『トランスポート!』

音声と共に、あざみの手には一振のナイフが握られていた。

「これは」

『それはエターナルナイフ、君の技量なら使いこなせるはずだ!』

「そんな短いナイフで何ができるのかなあ?」

男の拳が、あざみに目掛けて振り下ろされる。

その瞬間にあざみは跳び、男の腕を切り裂いた。

「がっ!」

…そんなものお!!」

腕を再生させながら、あざみを捕らえようとするも、その流れるような動きによって切り刻まれる。

「くっ、おいクソ蜘蛛ども!!」

お前らは俺の道具なんだ、見えないで役に立て!!」

「この人たちに、そんなことさせない!」

望月流忍法…奥義!

無双手裏剣!!」

周囲から這い寄ろうとする蜘蛛たちが全て、手裏剣によつて壁に突き立てられるがその全てが手裏剣に刺さっておらず、枷になるようになって動きが止められた。

「この役立たずどもが!」

仕方ない、これでも喰らえ!」

両手であや取りの形をした糸を飛ばし、続けざまに引きずり出すように足場から糸を上げる。

それを目に止まらぬ速度で、その全てを切り裂いていく。

「ふっ、あのさっ？」

糸の硬度がこれで限界だなんて思わないでよね？

…血鬼術・刻糸牢！

からの、殺目籠！」

「むっ！」

『イツツタイムフォーバスター!!』

すぐさまナイフを操作し、二重に迫り来る赤い糸を突っ切るように切り裂く。

「なっバカな!？」

この糸は最高硬度の糸なんだぞ!？」

こうなったら、殺すしかない！

血鬼術…」

「遅い!」

「はっ。」

構えるよりも速く、あざみはそのまま男の体を素早く切り裂いた。

何が起こったのか分からず、男はそのまま後ろに倒れ、元の姿に戻った。

そして、あざみはそのままブレスを操作して、男から特典を回収した。

それと同時に蜘蛛にされた人たちも元に戻った。

「うん、これで一件落着。」

もう大丈夫だから、出てきて」

「は、はい！」

それと、良いかな？」

「えっ?」

呆けていると、女の子があざみに抱き着いてきた。

「ありがとう、忍者のおねーちゃん！」

「すぐかつこ良かったよ！」

「えっええっ!」

あ、あざみ、そんなに忍者に見えたのかな?」

「うんっ、さっきの変わり身もそうだし、ぴよんぴよん跳び跳ねたり手裏剣飛ばしたりして、まるで時代劇に出てくる忍者みたいだった!」

「そ、そうなんだ…、そうなんだ、ふふっ♪」

あざみは嬉しさのあまり、ジョーと不破が来るまで女の子を抱き止めるのだった。

解放した子供たちは、駆け付けたジョーと不破が見つけて、警察に保護してもらい、あざみが助けた女の子も保護してもらった。

蜘蛛にされ元に戻った人たちも、すぐに病院に搬送された。

そして、今回の事件の犯人である男は、そのままジョーたちが警察に引き渡し、逮捕された。

特異点から戻ってきてから、あざみはすぐに拠点飛び出し、大好きな饅頭を買いに行く。

(誠十郎、おじいちゃん、皆…、あざみはここでも、ちゃんと忍者としてやってるよ)

心の中で、かつて所属していた帝国華撃団の皆や育ててくれた頭領にして祖父・八丹齋に今回のことを報告し、その誇りを胸に、足を早めるのだった。

爆裂する街を掛けるチーター

…っ、ここが特異点？」

「何だろう、これ」

「おいおい、これはひどい有り様だな…」

特異点にたどり着いた三人が目の当たりにしているのは、建物が破壊され、逃げ惑う人々の姿。

そしてそれを追いかけて回す人間サイズのロボットたちと、その奥では巨大なロボットが街を破壊し回っていた。

「とにかく、今は目の前のロボットたちを何とかしよう！」

「おう」

「うん！」

『イツツモーフィンタイム！』

『レッツツモーフィン!!』

三人は変身し、人々を避難させながらロボットたちを迎え撃つ。

「ふっ」

「はあ!!」

「やあ!」

ジョーは加速装置を使いながらロボットたちを打ち負かし、不破はバスターを撃ちながら肉薄しロボットたちに強烈なパンチを食らわせていき、あざみはクナイを手にジャンプして翻弄しながら素早くロボットたちを切り刻んでいく。

「くっ、数が多い!」

「このままじゃあのデカイのにも近づけねえぞ!」

「っ、二人とも、大きいロボットがこっち見てる!」

「おっ何だ何だ?」

新しい雑魚キャラの登場ってか?」

その言葉と共に、巨大ロボットが体をジョーたちに向ける。

『おいおい、せっかくのゲームを邪魔するじゃねえっての!』

「君がこの騒動を引き起こしているのか!」

なぜこんなことを!」

『ああ?』

俺にとつては戦争はゲームなんだよ!」

こう言う風にここのやつらをプチプチつぶつ殺してスコアを上げるのが楽しいん

だつての!』

「なっ!?!」

「ちっ、ムカつくやつだな。

何なら力づくでもてめえをそこから引きずり出してやるよ!」

「この外道め、覚悟召されよ!」

『おいおいお前らみたいになやつにできるとでも?』

お前らはそいつらと戯れてろよ!』

そう言うと同時に三人の周りを人間サイズのロボットたちが囲い込む。

「くそっどけっ!!」

『んじゃ、せいぜいそのメタロイドどもを掻き分けるんだな。

さてさて、俺は人間どもをプチプチ潰して、スコアを上げねえとな』

それだけ言うくと巨大なロボットが街へと向かおうとする。

「くっどうすれば…!」

そんな時、ブレスから通信が入った。

『ふっふっふ!』

狼狽えるでない貴様ら!』

「…っひな!」

『要は一刻も早く彼奴の元へと向かって倒せばよい！』

こう言うこともあろうかと、今そっちに向かわせておる。

ジョー、貴様が乗り込め！』

「えっ乗り込めって」

何のことだかわからなかったが、街の中を巨大な赤いスポーツカーがジョーたちに向かって走ってきた。

そして。

『ジョー、乗り込め！』

これはお前専用のバスターマシンだ！』

「その声はニツク!？」

…わかった!」

ジョーはそのまま飛び込むように中へ入ると、中にはハンドルになったニツクがいた。

「ニツク、これは」

「こいつは『CB-01 チーター』、お前専用のバスターマシンさ。

使い方はすでにお前の中にインプットされてるからわかるはずだ!」

「…っ、そうか。」

わかった、やってみる！」

ハンドルを握ることで改めてチーターの使い方が手に取るようにわかったジョーは目の前の巨大ロボットに目を向ける。

『おい島村！』

行けるか？』

「大丈夫だ不破さん！」

あざみと一緒に皆を守ってくれ！」

僕は彼を倒す！」

『良いだろう』

『うん、心得た！』

そうして不破とあざみとの通信を終えて、チーターを走らせる。

「させるかあ！」

コンソールを操作し、チーターの側面からバルカンを展開し、巨大ロボットに向けて撃つ。

『ぬうつ！』

『こいつまさか!?!』

怯んで驚いたのか、巨大ロボットがチーターに向く。

その時だった。

バババアンツ!!とチーターの両サイドが展開、そのままバルカン発射される。

まるで戦車の如くバルカンが連射されていた。

しかしバルカンと言っても普通のそれではない、弾自体が炎を纏ったような物凄いのだったのである。

まさしく、弾丸の火炎放射器と言ったところだ。

それもただの連続的なものではない。

「す、すごい!!」

その威力たるやすさまじかった。ロボットたちはその猛撃の前に瞬く間に撃破された。

さらに巨大なロボにまでダメージが入っているようであった。

反撃に巨大ロボがキャノン砲を向けてきたので、ビークルモードからアニマルモードに変形し、飛びついて巨大ロボの頭部に齧り付く。

『ぐっ、こいつう…っ、離れろ!』

巨大ロボに振り払われ、チーターは着地すると同時にビークルモードへと戻る。

そこに巨大ロボが砲撃を繰り返し出し、ジョーはチーターを走らせながら避ける。

すると、攻撃を避けられた瞬間を狙って巨大ロボがまたビームを放つ。

だが。

「うおおおつ!!」

ジョーと同時の声と共に、チーターは変形する。

だがそれはアニマルモードではない、ロボットだった。

『行けえジョー!』

ゴースターエースの力を見せてやりなあ!!』

ニツクも声もあつてチーターが変形したロボット、ゴースターエースは空を舞い。

ズバンバガン!!! と、大砲のように両肩のミサイルを構えてから放った。

しかもその火力は他の形態よりもはるかに高くなっていた。

そしてそれを、ジョーは思いつき叩き込んだ。

「喰らええーつ!!!」

ドカオオン!!と激しい爆発が起き、ジョーとゴースターエースはそのまま巨大ロボ

を吹っ飛ばす。

巨大ロボはビルを巻き込んで転倒する。

同時に、街を襲っていた大量のメタロイドたちも巻き込まれるように倒れた。

『ちい、いっつうっ!』

即座に起き上がり、巨大な大剣を構え斬り掛かる。

ゴースターエースも剣を構えて迎え撃った。

ガギーン！ という音を立てつつ火花が散るも互角に見える。

しかしその力は圧倒的に相手の方が上のようなのである、じり、じりと押されているのがジューにはわかっていた。

「つく、まだ出力を上げれるはずなのに……！」

『焦るな、力を受け流せる！』

ニツクの言葉通り、力を受け流すように剣を振るうゴースターエース。

ザギンツ、ザギヤーンと金属を斬るような鈍い音を奏でながらも次第に受け身が取れるようになったジューはその剣圧を弾き飛ばし、一気に巨大ロボットの胸部を切り刻んだ。

「よしー！」

『まだまだあ!!』

仰け反りそうになりながらも、巨大ロボは足を踏ん張って、そのままゴースターエースに斬り掛かる。

ザン、ザク、グシャリと重い衝撃を響かせ続ける両者の戦い。

しかし徐々にはあるが、ゴースターエースは巨大ロボを切り裂き始めた。

それに伴って、出力が落ちてきているのか、機体のあちこちがショートして、動きが

鈍くなつてきている。

『ジョー、決めるぞ!』

「ああ!行くぞ!」

『イツツタイムフォーバスター!』

その音声と共に、剣にエネルギーを纏わせ、そのまま巨大ロボを両断した。

『そ、そんなばかな!』

「この俺が、こんなザコにい!!』

その言葉と共に巨大ロボは爆散した。

『イツツタイムフォーバスター!』

「はああああ!!」

「やああああ!!」

時間じくして不破はバスターで、あぎみはブレードでメタロイドたちを全滅させた。

「ふつ、これで終いか」

「あつ、あれを見て」

「んっ?」

「…ふんっ、やるじゃねえか」

ジョーが乗るゴースターエースが転生者の乗る巨大ロボを撃破するところを見て、

二人は安堵した。

その後ジョーは巨大ロボの残骸から転生者を見つけて、特典を回収した。街に甚大な被害が出たが、死亡者はいなかったようだ。